

ジャムカとの戦い
チンギス・カンの前半生 その4

Former half-life of Chinggis Qan No.4
The battle against Jamukha

2020年5月5日改訂

安田公男

May5,2020 Kimio Yasuda

URL : chinggis-ff

はじめに

テムジンは新婚後間もない妻ボルテをメルキト族に奪われたが無事に奪還した。母ホエルの経緯からしてもボルテはもう戻ってこないと考えていた多くの人々は、テムジンの政治力に驚いたであろう。そのような長男に加え、カサルやベルグテイの弟たちは屈強な成人になっており、テムジン一家は最早数年前のような弱々しいものではなくなっていた。ココ・ノールやブルギ河岸という仮の牧地を離れて、父祖伝来のオノン河上流とホルホ河流域の牧地に速やかに戻っていったらう。それは妻奪還の直ぐ後、テムジン 20 歳くらいの頃と想像する。それから十数年後の 1196 年、数え 35 歳の時のウルジャ河の戦いではモンゴル部族の西半分を占めるキヤト氏族のカンとなってモンゴル軍を率いていた。モンゴル部族の中心地に長く居て力をつけていた結果であった。その間の出来事で各書共通に述べているのは、①ジャムカとの戦い（いわゆる十三翼の戦い）、②諸氏族、諸人の帰順、③同族セチェ、タイチュとオノン河での宴ともめ事、④金軍に協力してウルジャ河でタタル部族を討伐、となる。だが、その細部の表現は史書ごとに異なっており、理解しがたい点もあるので見ていきたい。先ず、ジャムカとの争いの前後のことを考えていく。

1. 史書の比較

各史書の要約を載せて比較したが、史書の構成が異なっているので、秘史の部分は既に考察した部分も若干含む。人の名前や部族名などの表記は史書によりぶれているので、村上の書を元にしたが、参考のできないものは史書の漢字音を基にそれらしく表記した。

1. 1 元史

番号	記事内容(抄)
1	イエスゲイが亡くなった。テムジンは幼く、部衆の多くはタイチウに付いた。ホエルンは去った者を追い大半を還した。
2	テムジンの族人ジョチは分かれてサリ河にいた。オレゲイ泉にいたジャムカ部のトダイチャルは、サリ河のジョチの馬を盗んで行った。ジョチは仲間と共に群馬に隠れてトダイチャルを射殺し、馬を取り返した。
3	ジャムカはこれを恨み、タイチウ諸部と合わせて三万の兵で向かって来た。
4	テムジンはダランバルジュスの野にいたが、変を聞いて大いに軍を集め 13 翼*に分けた。ジャムカが来たので大いに破り走らせた。*十三翼の説明無し
5	当時タイチウ部の土地広く民多く、最強と号していた。タイチウに属するジェウレイ部はテムジンの牧地に近く、テムジンと獵で出くわした。テムジンはその夜の同宿を誘った。ジェウレイ部が言うには、「元より願うところだが、食糧不足なので従者 400 人の半数を帰したところである。今どうしたものか」。テムジンは強く同宿を勧め、残った者全てに食事を与えた。翌日も狩りを行い、ジェウレイ部へ獲物を追ってやった。彼らはこれに感激し、「タイチウは我が兄弟だが、常に車馬や食料を奪っていく。人に君たる器量が無い。君たる者はテムジンか」。
6	ジェウレイ部長玉律（オリ？）はタイチウに虐げられて耐えられず、タカイダル部の部衆と共に部衆を率いて帰順し、自分たちでタイチウを殺すと言った。 テムジン曰く、「我々は熟睡していたが、あなたたちは目覚めさせてくれた。これから進む道では奪った物を全て汝に与えよう」。しかし、二人はその言を実行できず背き去った。タカイダルは途中でタイチウに殺されて、ジェウレイ部は滅んだ。

1. 2 集史

番号	記事内容(抄)
1	1168 年、テムジン 13 歳の時、父イエスゲイを喪った。彼を妬み恨んでいたタイチュート部はイエスゲイの残した部衆を奪った。ホエルンは去った者を追い、いくらかを還させた。

2	ジャジラト部の首領ジャムカ・セチェンの親族にデウタチャルがいた。何人かの仲間とサリ河のオレガイ泉地方のテムジン領域に盗みに行った。ジャライル部のジュチタルマラの馬と家畜を奪おうとした。ジョチタルマラはこれを知り、馬群に身を隠して、デウタチャルが近づいてくるやいなや一矢で射殺した。これにより、ジャムカとテムジンの間に対立が起きた。
3	ジャムカは戦うに当たり、タイチュートに近づいた。他のいくつかの集団も加わり連盟を成した。その中にはコンギラト部に属するイキラスなどもあった。彼らは長くテムジンに敵対し、紛争が起きた。
4	彼らの敵対によりテムジンは疲れ果て、周囲の者も親族も去った。一時は敵の手に落ち、ソルカンシラにより助けられたこともあった。数年内に色んな事が起きたが、テムジンは諸部を集めて地位を固め、連合するに至った。
5	最後にタイチュート人と諸部落は連盟して三万騎で向かってきた。テムジンはその動きを知らなかった。幸いにも、タイチュートに属したイキレス部にネクンがいた。彼の息子ボトはテムジンの下にいた。ネクンはバルラス部人ムルケとトタク二名を通じて敵の意図を知らせた。テムジンはダランバルジュス地方にいた。両人は密かにアルト、トルアウト二山を越えて状況を知らせに来た。テムジンは軍を集め、十三のクリエン（団營）を作った。
6	*クリエンの説明と、13翼の構成について記載あり。クトラ・カンの息子ジョチ・カンの名がある。
7	タイチュートの軍がダランバルジュスに攻め寄せて来て戦いが起きた。テムジンは三万の敵を殲滅した。
8	その地方に大きな木があった。ジンギスカンはそこに駐屯して大きな鍋を七十用意し、乱を起こした敵人を煮殺した。ジャレイト部は恐れて屈服し、テムジンの領域近くに移して来た。ただし、そのうちの幾人かは後に背いた。強大なタイチュートはこの戦いで壊滅し、誰一人領地に帰れなかった。
9	ジェウレイト部はテムジンの領域近くに居た。テムジンは猟で彼らと出くわし、それを助けた。彼らはテムジンと同宿したかったが、食事の準備がないので400人の半数を帰した。残りの衆にテムジンは食事を与えて一夜を過ごした。翌日の狩りの獲物も彼らに分け与えた。彼らはテムジンに感激して言った。「タイチュートは我々の面倒を見ないが、テムジンは我々と付き合いがないにも関わらず厚く遇してくれて礼物もくれる。彼は本当に配慮の出来る君主だ」。彼らはテムジンの評判を広めた。

10	彼らが自分の営地に帰ったとき、首領の一人ユリ？（玉律）・バートルとマクタイ・ヤダナは、テムジンに従おうと相談したが、マクタイ・ヤダナは反対した。オリ・バートルは直ぐにタカイダルや他の親族とテムジンの所に帰順して来て、「我々はもう頼る者の無い身だ。あなたとの友誼のために敵と戦わせてくれ」と言った。テムジンは言った。「我々は眠っていたが、あなたたちは額の髪の毛を引っ張って目覚めさせてくれた。私は身動きできず座っていたが、重荷から引っ張り出して立たせてくれた。私は力限りあなたに報いよう」と言った。彼らを慰め激励した。しかし、しばらくして彼らは約束を守れず又背き去り、各地を流浪した後四散した。
11	後にジェウレイト部の首領はジャムカ・セチェンになった。彼は賢くて能力があったが、ずるい人であった。テムジンは義兄弟として付き合っていたが、ジャムカは陰では恨み、自分が上に立とうと思っていた。
12	しばらくして、先に述べた諸部落はこぞって言った。「タイチュートの幹部は常に我々を苦しめるが、テムジンは服を脱いで我々に与え、乗っていた馬を降りて与える。彼は人や軍への配慮ができるので、国をよく治められる人だろう」
13	スルドス部のソルカンシラの息子チラカン・バートルとベスト部のジェベが帰順した。バーリン部のシルゲトゥ・エブカンが息子ナヤとアラクと共に帰順した。

1.3 元聖武親征録

番号	記事内容(抄)
1	イエスゲイ死す。テムジンは幼かったので部衆の多くはタイチウに付いた。ホエルンは去った者を追いかけて多くを取り戻したが、又去った。
2	テムジンの族人ジョチは分かれてサリ河にいた。ジャダラン氏ジャムカ部のトダイチャルはオレゲイ泉にいた。仲間と共にサリ河に来てジョチの馬を掠めた。ジョチは仲間と共に馬群に隠れてトダイチャルを射殺した。
3	ジャムカはこれを恨み、タイチウらの諸族と合わせて三万の兵で向かって来た。
4	テムジンはダランバルジュスの野にいた。イキラス部人のネクンの子ボトは先にテムジンに使えていたので、ネクンはクレルグ山よりブイタイ、ボカの二人を使わせてアラウトラウの二山を越えて変を告げて来た。テムジンは衆を集め13翼に分けた。
5	*十三翼、実数は十一翼の構成の記述。クトラ・カンの息子ジョチ・カンの名あり。
6	テムジン言う。「我が方は熟睡していたが、前髪を引っ張って悟らせてくれた」。高く座り直して髭をめぐり上げて更に曰く、「汝の言葉は私の心に適った。汝の兵車の至る所私は全力で助ける」。誓いが終わった後、二人は約束を違えて背き去った。

7	族人クシュクルジャンはタカイダルを恨んで落ち着かず、ついに殺した。ジェウレイ部は滅んだ。タイチュウ部衆はその長の非法に苦しんだ。人々曰く、「テムジン自分の衣服を他人に着せ、自分の馬に他人を乗せる。民を安んじ国を治めるのはこの人だ。」チラウン・バートルの父ソルカンシラがこれを説き、ジェベがやってきた。シリカエブカはクアシバツ、タルクタイの二人と来たが又去った。が、自分の子、ナヤ、アラ二人を帰順させた。ドラングヤマンガの諸部も来た。
---	--

1. 4 元朝秘史

番号	記事内容(抄)
1	イエスゲイ死後、部衆はタイチュートに従い、ホエルンたちは見放された。テムジンが誘拐されたが、無事に逃げ出しボルテを妻に迎えた。だが、メルキトに妻をさらわれた。テムジン、ジャムカ、トオリル・カンの三人の軍団でメルキトに討ち入り、ボルテを奪還した。
2	テムジンとジャムカはアンダ（義兄弟）の誓いをして共に暮らしたが、一年ほどしか続かなかった。その後いくつもの氏族が慕ってやってきた。氏族を離れてやって来た者も多かった。（多くの氏族名、個人名あり）
3	アルタン、クチャル、サチャ・ベキなど、キヤト氏の首領が集まり、テムジンをカンとし、チンギス・カンと呼んだ。各人に職掌を与えた。
4	ジャムカの弟タイチャルはオレゲイ泉にいたが、サアリが原にいたテムジン方のジョチ・ダルマラの馬を盗んだ。ジョチは一人で追いかけて、馬に隠れてタイチャルを射殺し、自分の馬群を取り返した。
5	ジャムカはこれを恨み、十三の部族を味方にし、タイチュート、イキラスらの諸族と合わせて三万の兵で向かって来た。（十三の部族名の記載なし）
6	イキラス部人ムルケ・トタクとボロルダイが、アラウト、トルカウトの二山を越えて、グレルグ山にいたテムジンに変を告げて来た。テムジンは十三の団營があったので、同じく三万の軍勢となってダランバルジュトで対戦した。テムジンはたちまち敗れてオノン河のジェレネ狭間に逃げた。
7	勝ち誇ったジャムカは、自分たちに背いたチノス族の者を七十の鍋で煮殺した。
8	ジャムカに敗れたのにもかかわらず、そこを去って、ウルウト、マンガトなどの氏族がテムジンの下に帰順した。

2. 考察

2.1 イェスゲイ死後の部衆の離反（史書番号1）

元史は、イェスゲイ死後の部衆の離反をホエルンが引き留めた、で終わっている、あたかも

そのまま一家の力が続いたような記述であるが、又去って行ったとある他の史書が正しい。

2.2 テムジンがチンギス・カンとなる（秘史 11）

他書でチンギス・カンとなったのは 1206 年の事となっている。一方秘史ではジャムカとの戦いの前で、まだ二十歳代と推測される頃である。そんな時期に特別な称号を得て全部族を率いるカンに就任したというのはおかしい。しかし、テムジンがかなりの部衆を率いる立場になっていたのは間違いないだろう。彼が不幸な境遇を乗り越えて、亡き父イエスゲイの年齢を超えることが出来た年は成人から 13 年目となる。それを祝うために、キヤト氏族の人々が集まったとしても不思議ではない。後で述べるが、その主賓は父の従兄弟にあたるジョチで、当時モンゴル部族のカンであった。彼の助力によってテムジンは父祖の土地に帰り、部衆を増やして力をつけることが出来たと考えられる。モンゴル部族の中の指導者の一人としての立場が固められたという、めでたい集まりがあったと理解したい。この時集まったのが親征録に記されている 11 の集団だろう。

2.3 ジャムカとの戦い（元史 2～4、集史 2～8、親征録 2～5、秘史 3～7）

2.3.1 戦いの発生原因

秘史に書かれているように、この事件の発生以前からジャムカ側よりテムジン方に帰順する人々が相次いでいて、ジャムカは苦々しく思っていたのだろう。二人が共に暮らしたという一年の間に、テムジンの人気が出たのだろう。彼の個人的資質もさることながら、母親のホエルンや弟たちが協力しあう姿と、次々に子を生む妻のボルテという豊かな家族的雰囲気も大きいだろう。ジャムカは家族に恵まれないので耐えられなくなったと思われる。彼の別れたい気持ちにいち早く気づいたのがテムジンの妻のボルテだったとの秘史の記事がそれを裏打ちする。昔馴染みのテムジン達には平静に対応していたジャムカだが、新入りのボルテには妬ましい視線を向けていたのに違いない。それで別れたが、しょうがないこととジャムカはあきらめていたと思う。ところが、家柄の良いテムジンは、ジョチ・カンを初めとするキヤト氏族のリーダーたちが成長を喜んでくれ、将来カンにもなれようかという祝いをしてくれたのである。それを知ってジャムカは敵愾心を燃え上がらせただろう。ジャムカはモンゴル部族の中でもジャダラン氏族という傍系であり、そのようなことを望めなかった。実力は自分が上であるのに血統だけであいつは良い思いをする、と言う感情が加わったのだ。そんなジャムカの心情を知った親族がテムジン方に一泡吹かせてやろうと馬泥棒を企んだものだろう。ただ、彼らの勢力圏の中心部でやるのはまずいので、外れのサーリ・ケールに行ったのだろう。それが大失敗に終わったので、なおさらジャムカの感情が爆発して戦いが起きたと考えられる。しかし、テムジンはこれがジャムカとの間で大きな争いに発展するとは全く思っていなかった。草原世界で馬泥棒は重罪であり、盗みに行った方が悪いからである。

2.3.2 勝敗

いわゆる十三翼の戦いの原因を作った人間の名は秘史のように弟のタイチャルであり、トタイチャルではない。この戦いを、元史、集史はテムジンの勝ちとし、親征録には勝敗の記載が無く、秘史はテムジンの負けとする。秘史でジャムカが報復のために行ったこととするチノス族の釜ゆでが、

集史ではテムジンが敵に対して行ったことになっている。これではすぐ後に続くテムジンの包容力の記述と全くそぐわないから、やはりジャムカの仕業である。上で述べたように、ジャムカの方に戦う動機が強く、テムジンにはない。そんな二人が戦えば、動機の強い方が勝つのに決まっている。テムジンは負けたが、かえって人気が上がった。ジャムカの非を人々が認めていたからだろう。

2.3.3 戦いの規模

13や3の数が出てくるが、秘史の文を見ると3日とか3度とか3の数が好まれる傾向がある。実際の数かどうか怪しいのは以前から指摘されている。実数だとしても戦士の数ではなく非戦闘員も含んだ数字ではなかろうか。親征録では11翼しか記載がなく、元史と秘史には構成内容が記されていない。大きな戦いのように書かれているが、偉大なチンギス・カンの最初の戦いだったので、後世に誇大に書かれるようになったと思われる。この戦いの当時はジョチ・カンの治世下であったので、テムジンもジャムカも彼の配下という身分に過ぎず、キヤトとタイチュウト氏族上げての大対決になるはずがない。戦いは基本的にテムジンとジャムカの間だけで行われたものであろう。

2.4 ジョチ・カン

いわゆる十三翼の一つとして、クトラ・カンの息子のジョチ・カンという人物が集史と親征録に記されている。親征録には、忽蘭脱可汗（蘭脱は前後入れ替わり）の息子の搠只可汗とあるから、正真正銘のモンゴル部族のカンという認識である。前稿で、イエスゲイが死んだ翌年にタイチュート氏族のアダルがカンに選ばれていたと推測したが、アダルの死後にキヤト氏族のジョチがモンゴル部族のカンになっていたのだろう。テムジンの祖父の弟の子、即ち父イエスゲイの従兄弟だから、この時40歳前後と推測される。秘史にはテムジンがトオリル・カンに部衆の取り戻しを依頼したとあるけれども、隣の部族のカンに依頼するのはおかしい。自分の部族のカンに依頼してこそ取り戻せるはずで、それはジョチだ。彼の名とテムジンの長男の名が同じということは偶然ではないと思う。一家が本領へ帰還することを彼が保証してくれて、ボルテの奪還にも陰で尽力してくれたのではなかろうか。その時に息子が生まれたので、感謝の気持ちを込めて同じ名前を付けたと思われる。また、テムジンの弟カサルもジョチ・カサルと呼ばれることがある。これは同じ名を持つ別人と区別するための俗称と思われるが、やはりジョチ・カンとの縁を表わしているように思う。ジョチはテムジンやその兄弟が優秀なことに期待をもち支援していたのだろう。

各史書はクトラまでモンゴル部族のカンの名を継続して記すが、その死後はテムジンまで書いていない。だが、カン不在であったと考えるのは難しい。集史と親征録にはアダルというカンとジョチというカンの存在が記されているから彼らがクトラ亡き後のカンだったのだ。だが、アダルはタイチュートとの激しい対決があり、ジョチは彼の弟のアルタンが最終的に反逆したから、彼らの事績が史書から消されてしまったのだろう。ジョチとの関係はトオリルとの関係として書き直されてしまったのではなかろうか。

2.5 ジャムカ

戦いを仕掛けたジャムカは、ジョチ・カンの不興を買ってキヤト氏族の牧地近くにいられなくな

ったのだろう。それで、タイチュート氏族の多いオノン河下流域へと牧地を移動したと思われる。ジャムカとタイチュートが結束してテムジンに向かってきたという集史の内容は、戦いの結果として起こったのであって、初めからそうだったのではない。ジャムカは1996年末から1998年頃に金国を攻撃している(1)。1201年にはタイチュート氏族やコンギラト部族から押されてグル・カンにも推挙されている。指導力に秀でていた人物であったことは間違いないが、若い頃どのようにして力をつけたのかの記録がないし想像も難しい。集史には頭が良く仕事も出来たが、ずるい人間であったと書かれている。弱小氏族で無理をしていたように思われる。

2.6 親征録の11の集団

これらの集団は、2.2 で述べたテムジンの祝いに集まった集団であろう。その直後にこの争いになったので、テムジン勢力と書かれたのだろう。この後対立し滅ぼすことになるジュルキン氏族は親征録の集団の中に入っていないが、集史では13翼の一つに入っている。数字合わせのために後世書き入れられた可能性が高い。

2.7 戦いの年

この戦いがテムジンの何歳頃に起きたのかを知りたいのだが、どの史料を見ても手がかりがない。筆者は、テムジンが20歳で故郷に帰り、35歳でキヤト氏族のカンになったと考えているから、その中間点あたりであろうか。30歳頃のこととすると、それから4、5年でカンになるまでの力を蓄えるのは難しいだろう。父親イエスゲイは27か28歳の時に死んだと推定したから、その年齢は成人から13年ほど経った時になる。2.3 で述べた集まりは、父親の死んだ年齢をテムジンが無事に超えて大きく発展した事を祝った意味が大きかったと考える。その季節は春であり、馬泥棒事件があったのが夏か秋となろう。祝いに集まったのが13近い集団だったので、13年記念との両方の意味から13翼の戦いという言葉ができたのではなかろうか。テムジン数え28歳、西暦1189年の夏か秋に戦い、というか、ジャムカに一方的に攻め込まれた事件があったとしたい。

2.8 ジェウレイト部へのテムジンの言葉（元史5、6、集史9,10、親征録6、秘史なし）

元史と集史では、ジェウレイトは滅んでいった者の代表のように書かれている。大きな心を持つテムジンにも付いて行けなかった人たちがいることを残したかったのかとも思うが、大きく取り上げている必然性があまり感じられない。親征録の記録くらいが分量として適当と思える。秘史にはその記述がない。だがここではそれを問題にしない。元史と集史の、ジェウレイト達が帰順した時のテムジンの発言に疑問がある。

元史では、「我々は熟睡していたが、あなたたちが目覚めさせてくれた。これから進む道で奪った物は全て汝に与えよう」とあり、集史では、「我々は眠っていたが、あなたたちが前髪を引っ張って目覚めさせてくれた。私は身動きできず座っていたが、重荷から引っ張り出して立たせてくれた。私は出来る限りあなたに報いよう」とある。しかし、テムジンにジェウレイト達の帰順してきた気持ち分かり、タイチュート内部の実情が分かったところで、驚いて目が覚めるだろうか。奪った

物を与えると言うが、一体どこから奪おうとしているのだろうか。同様の会話文は親征録にもあり、十一翼の構成の直後に書かれている。それに続き、約束を破り背いていなくなった、との文があり、その後は話が違って、クシユクルジャンがタカイダルを殺してジェウレイト部が減んだとある記事になる。会話文がそこにつながっているとは思えない。するとこの会話文はジェウレイトと交わしたのではなく、十三翼の構成の直ぐ前にある、ブイタイとボカの使者二人に言ったものである。ここでテムジンの立場で馬泥棒事件を考えると、このような事で殺し合いが起きることは草原世界ではたまにあることであるが、盗みに来た方が悪いのでこちらには非がない、となる。大事件になるとはテムジンはずゆ思っていなかったのだ。ジャムカが襲ってくるのが間近であることを使者から聞いて愕然としたので、「私たちは熟睡していた」、即ち危機を感じず安心して、との言葉になったのだろう。目が覚めたので背筋を正して座り直し、危険を冒してやって来た彼らと一緒に戦おうと誓い、貴重な情報をもたらせた二人を守る気持ちを表すために、「おまえ達の兵車が進めば全力で助け、(戦いで) 奪った物をおまえ達に(褒美として) やる」と言ったのだ。本来ならばテムジンの言葉は、十一翼の構成の前にある使者の報告に続かなければならない。ところが後ろにあるということは、使者二人がテムジン方の戦いの準備を見ていたという時間経過を表わしているのだろう。それを見ていて二人は勝ち目がないと判断し、負けて捕まったら自分の身が危ないので逃げたのだ。テムジンは戦いが迫っていることを知り、11の集団へ状況説明や援軍要請をいただろう。しかし、十分な備えができない間にジャムカに襲われて敗れたのだろう。各史書の元資料も親征録のような配列だったが、テムジンの負けを書かなくなってしまった為、会話部分が後段のジェウレイト達に向けた言葉と混同されてしまったのではなかろうか。集史に、「汝らは重荷から引っ張り出ししてくれた」とあるが、全くピント外れの言葉である。恐らく事情が分からなくなっていた後世の編者が想像によって書き入れた言葉であろう。

秘史にもジェウレイト氏族の記述はあるが始祖ボドンチャル時代のことしかない。有名人も輩出しなかった氏族のようで問題にしていない。他書は滅びていった者を描くことで史書に膨らみを持たせ、テムジンの包容力の大きさを記述しようとしたのであろうか。あるいは、当時のモンゴル人の間で、腰が定まらずに落ちぶれていった集団の代表のように思われていたのだろうか。ともあれ、十三翼の戦いの記事と入り混じってしまったお陰で彼らの記録が残った。

2.5 集史の記事

集史の馬泥棒の件はタイチュートとの対立の発端に過ぎず、この事件から数年して戦いがあったとなっており、ジャムカの影は薄い。けれども彼の立場からすると、親族を殺されて何年も待つはずがなく、直ぐに攻めかかったのに違いない。テムジンがタイチュートにさらわれた時、ソルカンシラに救われたという話もここに入っているが、テムジンが成人して故郷に帰ってきた直後の無力だった頃の事である。また、後の1200年の記事にタイチュートを打ち破ったという記事があるので、この戦いでタイチュートが壊滅し一人も領地に帰れなかったと書いているのも矛盾している。以上のように、集史のこの部分の内容は時を変えて起きたことがこの戦いに関連させて一緒くたに記述されているので史書として正確でないし、対立関係をここでまとめたとしても位置が悪い。

3. 年表

以上の考察を元に年表を作成した。

年齢	西暦年	出来事
1	1162	テムジン生まれる
20	1181	ボルテを取り戻し、ブルギ河岸からオノン河ホルホ河流域に戻る。
21	1182	ジャムカと再会し、共に暮らす。
22	1183	ジャムカと別れる。
22～28	1183～1189	多くの人々が集まって来た。
28	1189 春	父の死亡時の年齢を超えたことを、当時のカンであったジョチも含めた多くのキヤト氏集団から祝われ、指導者の一人としての立場を固める。
28	1189 夏～秋	ジャムカに攻め込まれる（いわゆる十三翼の戦い）。
29～35	1190～1196	ジェベ、チラウンなど後に活躍する多くの人々が帰順した。

4. 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房、東京

：村上正二(1970)「モンゴル秘史 1, 2, 3」平凡社、東京

『集史』：『史集』(1983)、商務印書館、北京

：ドーソン著、佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史 1」平凡社、東京

『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局、北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注、文求堂蔵版(1910)、国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<参考文献>

- (1) 安田公男(2017)「『金史』に現れる人物「障葛」について」13-14世紀モンゴル史研究第2号 81頁

*注

コロナウイルス肺炎防止対策で図書館の利用が出来ない。参考にしたい資料があるが手持ちの資料だけで論を進めた。誤りや抜け落ちがあれば後で訂正する。

改訂履歴

2020年4月27日 初版

2020年5月5日 第2版 ジョチ・カンの解釈を新しくした。